

状況名詞および「状況名詞ダ」文における指示性や叙述性について

劉卓婷 (名古屋大学大学院人文学研究科博士後期課程)

要旨

本稿では、名詞句の指示理論とメンタル・スペース理論をもとに、宮田 (2004) に提示されている例のうち上位で代表的な状況名詞の「場合」および「感じ」、並びにその文末表現である「場合ダ」および「感じダ」における主語名詞文と述語名詞文との間にある意味関係や、それが文構造上有している性質を明らかにし、状況名詞および「状況名詞ダ」文は、程度差のある指示性や叙述性を有していることを検討した。論述の過程としては、まず、宮田 (2004) に例示されている状況名詞のうちから、使用頻度が高い上位 10 語を選出し、それらを考察対象とした。次に、沈 (2014) における連用形名詞に後続する「ガ」／「ハ」の量的研究を参考にし、状況名詞と見られる「感じ」における指示性や叙述性の特性が、ほかの状況名詞にも共通しているのかについて、「ガ」志向が一番高い「感じ」および「ハ」志向が一番高い「場合」を代表的なものとして、量的かつ質的な面から検証した。検証した結果、「感じ」は叙述性が高く、「場合」は指示性が高いことが明らかとなった。また、その結果は、沈 (2014) の結論と矛盾しないため、「ガ」／「ハ」志向が、状況名詞の指示性や叙述性の高低の傾向と関わっていることを検証できた。

1. はじめに

本稿では、宮田 (2004) によって提起されている「状況名詞」がコピュラ文と結合して用いられている「状況名詞ダ」文に注目したい。宮田 (2004) でも、状況名詞の文末表現について、個々の状況名詞の性質をもとに、より踏み込んで分析する必要があると指摘されているが、状況名詞に関する研究はその類義語群への意味分類に留まっている。「状況名詞ダ」という文は、今までの研究に出てきた「文末名詞文」、「体言締め文」、「人魚構文」と構造的に同じ種類の構文だと思われるが、「[主語名詞句] ハ [連体修飾節] 状況名詞ダ」という典型的な構文において、主語名詞句と状況名詞がどのような構文的・意味的な関係を持っているかをめぐっては、管見の限りまだ定説を得るに至っていない。状況名詞が文末表現になっているコピュラ文における性質についても、検討の余地があるように思われる。

日本語における「指示的名詞句／非指示的名詞句」という名詞句の分類と名詞句の指示性に関する議論は、坂原 (1989, 1990)、井元 (1995)、西山 (1985, 1992, 2003) などの一連の研究では、「指示的名詞句／非指示的名詞句」の対立をもとに体系的な分析がなされてきた。本稿では、先行研究における理論を踏まえ、「状況名詞ダ」文について考察をすすめ、状況名詞を統一的に捉える視点からより一貫性のある説明を目指す。

2. 先行研究

2.1 西山 (1985, 1992, 2003) における指示理論

名詞句の研究に関する指示理論として、西山 (1985, 1992, 2003) による研究を取り上げる。西山 (2003) によれば、日本語の名詞句は、世界の中の対象 (個体) を指示している「指示的

名詞句」および世界の中の個体を指示するような働きを持たない「非指示的名詞句¹」の2種類に大きく分けられる。その上で、「指示的名詞句」と「非指示的名詞句」を解釈するには、コンピュータ文の文環境と密接な関係があるとしている。このことは、次のようなコンピュータ文を通じて説明できる。

- (1) a. 名古屋は都会だ。
b. 琵琶湖は日本最大の湖だ。

(1a)の主語名詞句「名古屋」は世界にある「都会」としての個体を指示しているため、指示的名詞句であるが、述語である「都会だ」は、世界の中のある個体を指示せず、「都会」という属性を主語名詞句が持っていることを表し、非指示的名詞句のうちの叙述名詞句に相当する。一方で、(1b)の「琵琶湖」は指示的名詞句であると考えられるが、「日本最大の湖」は「琵琶湖」の属性を述べているわけではなく、「日本最大の湖＝琵琶湖」という同一指示の解釈ができる。(1a)はいわゆる「措定文」であるが、(1b)はいわゆる「(倒置)指定文」²であり、「指示的名詞句」と「非指示的名詞句」との区別はこのようなコンピュータ文の分類と対応関係があると考えられる。

2.2 坂原(1989、1990)におけるメンタル・スペース理論

坂原(1989、1990)によるメンタル・スペース理論は Fauconnier(1984)などに基づいて展開されているが、日本語の名詞句に関する重要な論考として注目に値する。坂原(1990:31)は「名詞句の意味・記述内容によって与えられる一種の関数で、時間、状況、コンテキストなどの変化に応じ、記述を満足する個体の集合から適当な値を選択する」のを「役割」とし、特定の個体を表す「値」を「役割」に対応する概念としている。このような「値/役割」という名詞句の解釈は、井元(1995)による、指示性の面から見た名詞句が「関数」としての構造を持つという観点と関連する概念であると言える。井元(1995)における名詞句の構造の分析は第3節で詳述する。

- (2) a. 紫式部は源氏物語の作者だ。
b. 源氏物語の作者は紫式部だ。

(坂原 1990: 33-34)

坂原(1989、1990)の分析に従えば、(2a)のように、「AはBだ」という形式において、Aの追加属性Bを述べる文は記述文であるのに対して、(2b)のように、「AはBだ」という形式

1 「非指示的名詞句」の下位分類として、主語名詞句にNという属性を帰す「叙述名詞句」および「XがNである」という命題関数を表す「変項名詞句」がある。

2 西山(2003:133)は、「誰が(=どれが)…であるか」という疑問文とそれにたいする答えを単一文のなかで実現している文である」ことを「倒置指定文」の特徴だと指摘している。なお、「日本最大の湖が琵琶湖だ」という指定文(「AがBだ」)の場合に限って主語の位置にも述語の位置にも指示的名詞句が現れることができ、「AがBだ」を「BはAだ」のように倒置することができる。

で「A=B」のような値の同定を表すのは同定文である。坂原（1989、1990）によって立てられた「記述文／同定文」という分類および「値／役割」という概念は、西山（1985、1992、2003）における「措定文／指定文」、「指示的名詞句／非指示的名詞句」とは完全に同じものではないが、極めて近い機能を有していると思われる。本稿は、コンピュータの前後の名詞句の意味機能について、名詞句の指示性に注目して考察を行うため、「記述文／同定文」が「措定文／指定文」に、「値／役割」が「指示的名詞句／非指示的名詞句」に対応していると考え、共通性を持つものとして取り扱う。

一方、上述した指示性に基づく名詞句の分類やメンタル・スペース理論が、本稿の考察対象である「状況名詞」に適用できるのかどうかは定かでない。次節では「状況名詞」とコンピュータ文の文環境との関係を分析しながら「状況名詞」が備えている「(非)指示性」やその高低の差を検討する。

3. 状況名詞から見る指示性や叙述性

宮田（2004）は「状況」「状態」「様子」について意味分析を行い、そしてその類義語群を「状況名詞」と名づけている。なお、状況名詞は「～状況だ」「～模様だ」のように、文末に付加されることが多いが、その文末表現の意味・機能について、個々の状況名詞の性質をもとに、より踏み込んで分析する必要があると宮田（2004）は指摘している。それにもかかわらず、状況名詞に関する研究はその類義語群への意味分類に留まっている。状況名詞が文と結合して用いられる際、文構造的にまたは意味的にどのような特徴を示しているのかについては、検討の余地があるように思われる。以下、先行研究における理論を踏まえ、状況名詞が文末表現として用いられるコンピュータ文における性質について観察していく。

本稿は、宮田（2004）が指摘している状況名詞の文末表現を、新屋（1989、2014）が言及している「文末名詞文³」と、角田（1996、2012）⁴が提唱している「体言締め文」あるいは「人魚構文」と同じ種類の構文と見なし、宮田（2004）に提示されている語例を代表的な状況名詞として、考察対象とする。

3.1 考察対象となる状況名詞

宮田（2004）に例示されている状況名詞⁵のうち、NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) を利用し、見出し語検索で頻度が高い順から上位 10 語を選出した。下記の表 1 の 10 語を代表的なものとして、状況名詞が用法上においてどのような特徴を持つのかを見ていく。10 語の状況名詞の中には、「感じ」「動き」のような連用形名詞もある。

3 新屋（1989）は、連体部を必須とし、コンピュータを伴って文末に位置し、主語と同値または包含関係がない名詞を「文末名詞」、文末名詞を持つ文を「文末名詞文」と定義している。

4 角田（1996）は「体言締め文」という構文を提唱したが、角田（2012）では、体言締め文は「[節]名詞だ」という構造を持つとされる。つまり、文の前半は動詞文と同じ構造を持っているにもかかわらず、後半は「名詞+だ」で終わっているということである。そのため、角田は「体言締め文」の特徴を尾は魚であるが胴体は人間である人魚に例えて「人魚構文」の名称を付けた。

5 宮田（2004）に提示されている状況名詞は、「感じ」「印象」「様子」「模様」などに代表される主観的・感覚的な類と、「状態」「状況」「傾向」「場合」などに代表される客観的・分析的な類に大別されている。

表 1 状況名詞における使用頻度が高い上位 10 語

順位	①	②	③	④	⑤
状況名詞	場合	状況	状態	感じ	様子
頻度	92392	27192	24309	19724	10398
順位	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
状況名詞	段階	動き	場	傾向	時
頻度	10259	10183	10076	8383	7986

このような連用形名詞について、沈（2014）は、連用形名詞に後続する「ガ」が後続「ガ」／「ハ」の全体に占めている割合を数量的に統計し、名詞の指示性の面から分析している。名詞の指示性と叙述性という概念は野田（1996）によって提起されているが、「指示性」とは特定の個体を指す性質であるのに対して、「叙述性」は「指示性」に対する相対的な概念で、形容詞のように性質や種類などを述べる性質である。例えば、「私」という名詞は、「学生」に比べると、指示性が高く、叙述性が低いということになる。つまり、指示性と叙述性の高低は 2 つの名詞を比べるときに相対的なものであり、名詞にはその高低についての序列があると思われる。

沈（2014）は、「感じ」「動き」のような動作・作用そのものを表す連用形名詞は、後続「ガ」志向の傾向があることを指摘している。また、沈（2014）によれば、連用形名詞に後続する「ガ」／「ハ」の使用傾向と連用形名詞の指示性の強弱には関連がある。つまり、連用形名詞は、それに後続する「ガ」または「ハ」の使用傾向から、指示性や叙述性の高低を分析できるということになる。

沈（2014）の分析結果に基づき、状況名詞と見られる「感じ」「動き」における指示性や叙述性の特性が、ほかの状況名詞にも共通しているかどうかについて、検証する必要があると考えられるため、次節からこの点について分析していく。

3.2 状況名詞の検証

3.2.1 量的な面からの検証

まず、NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) を利用し、本稿の研究対象である 10 語の状況名詞に後続する「ガ」が後続「ガ」／「ハ」の全体に占める割合を表 2 に示す。

表 2 状況名詞後続「ガ」の割合

ガ% ⁶	[80%, 90%)	[70%, 80%)	[60%, 70%)	[50%, 60%)	[40%, 50%)	…	[10%, 20%)
語数	1	3	1	2	2	/	1
語例	感じ	傾向、状態、動き	様子	場、状況	時、段階	/	場合

表 2 から、状況名詞に後続する「ガ」の割合で語数が一番多いのは、「70%-80%」の区間であるが、大半の状況名詞は「ガ」志向の傾向が見られることがわかった。なお、「ガ」志向が一番

6 「ガ」の割合にあたる数値の範囲は[a, b)のような実数区間の表記法で示し、例えば、[80%, 90%)の場合、80%以上90%未満を表す。

高いのは「感じ」であるのに対して、「ガ」志向が一番低い、即ち「ハ」志向が一番高いのは「場合」であることもわかった。このような傾向は、沈（2014）に指摘されている連用形名詞に関する「ガ／ハ」志向の傾向に従えば、「ハ」志向を持つ「場合」は他の状況名詞より、指示性が高いと想定できる。

一方、叙述性が高く指示性が低い名詞は、叙述性が高く指示性が低い形容詞や動詞に繋がるということが野田（1996）に指摘されている。そのため、沈（2014）に基づく状況名詞の推論と野田（1996）の論述とが一致しているのかについて、「感じ」と「場合」を代表的なものとして、「状況名詞+ガ」および「状況名詞+ハ」における述語部分のパターンを大まかに「動詞句」、「形容詞句⁷⁾」、「その他⁸⁾」に類別することにより、量的な面から確かめる。

「感じ+ガ／ハ」と「場合+ガ／ハ」の述語部分におけるコロケーションパターンの用例数は表3のようになる。

表3 「状況名詞+ガ／ハ」の述語部分におけるコロケーションパターン

パターン N+ガ/ハ		+動詞句	+形容詞句	計（+動詞句 ／形容詞句）	+その他	合計
感じ	+ガ	2445	311	2756	285	3478
	+ハ	218	72	290	147	
場合	+ガ	2971	1435	4406	145	25241
	+ハ	7455	965	8420	12270	

また、各コロケーションパターンの用例数がそれぞれ「感じ+ガ／ハ」と「場合+ガ／ハ」の全体の用例数に占めている割合をより直観的に見ると、図1⁹⁾のようになる。

図1 「状況名詞+ガ／ハ」の述語部分におけるコロケーションパターンの割合（％）

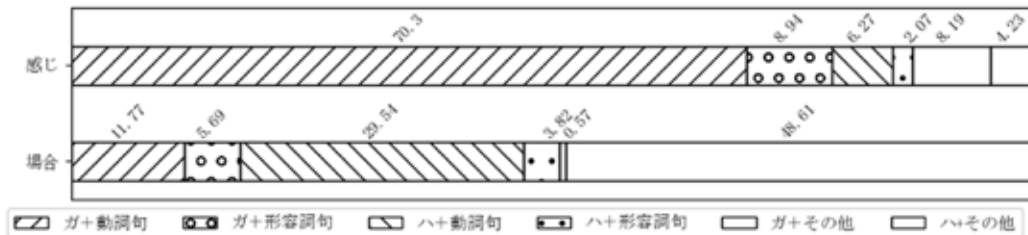


図1から明らかなように、コロケーションパターンとして、述語部分が「動詞句」の場合、「感じ+ガ」の割合が他より顕著に高い。「感じ+ガ」に後続する「動詞句」と「形容詞句」を

7 ここでは、「形容動詞句」も「形容詞句」として数える。

8 「その他」には、「氷の上を歩いています。その氷の感じは？歩いた感想は？」（『爆笑!!ひっかけ心理ゲーム』）、「きっと、別のところに監禁されていたんじゃないでしょうか。長峯夫人の場合はね。救出されたとき、ふと、そんなことを夫人がもらしておられましたから…」（『銭形砂絵殺人事件』）のように、形式上「動詞句」や「形容詞句」に分類できない用例が含まれている。

9 「その他」類は本稿の考察対象外であるため、図1には割合を示しただけで、空白セルにした。

合わせて見ると、「感じ+ガ/ハ」の8割近くを占めており、「感じ+ガ+動詞句/形容詞句」が多用されていることがわかる。また、「感じ」は「感じ+ハ+動詞句/形容詞句」を含めると、全体の9割近くを占めるのに対し、「場合」は動詞句または形容詞句を後続させる「場合+ガ」「場合+ハ」の両方を足しても、全体の半分程度にしかならない。前述した野田(1996)における指示性や叙述性の高低に関わる論述に基づく、「感じ」は形容詞や動詞に繋がりがやすいという点で、「場合」より叙述性が高く指示性が低い名詞だと思われる。これは、沈(2014)に基づく、「ガ」志向を持つ「感じ」は「ハ」志向の「場合」より指示性が低いが、叙述性が高いという想定と矛盾していないことになる。つまり、本小節では量的な面から、状況名詞が有する指示性や叙述性の高低についてその傾向を検証することができた。

しかしながら、状況名詞における指示性や叙述性の高低については、具体的な用例に基づいて分析する必要もあることから、次節で用例を通じた検証を行う。

3.2.2 質的な面からの検証

3.2.1節の表2から、連用形名詞である「感じ」は「ガ」志向の傾向が一番高いのに対して、「場合」は「ガ」志向の傾向が一番低いことがわかった。前述した沈(2014)の結論に従えば、「ガ」志向の「感じ」は叙述性が強いことを意味するが、「ガ」志向の代わりに「ハ」志向の傾向を持つ「場合」のほうは指示性が高いことになる。このことについて、本小節では「感じ」と「場合」を検証の対象として、具体的な用例から状況名詞の指示性や叙述性を分析する。本稿では、坂原(1989, 1990)における「値/役割」および西山(1985, 1992, 2003)における「指示的名詞句/非指示的名詞句」は野田(1996)の「指示性/叙述性」に対応している概念と考えることとし、「値—指示的名詞句—指示性」および「役割—非指示的名詞句—叙述性」という対応関係があると見なす。

第2節で述べたように、坂原(1990)における「値/役割」という名詞句の解釈は、井元(1995)で提起されている名詞句が持つ「関数」という構造と関連している。井元(1995)によると、指示性の面から見た場合、名詞句を一般的関数表示($F(x)=y$)によって説明すると、(3)に示すような関係になる。(3)における「値」や「役割」は坂原(1990)に定義されているものと同じ概念である。すなわち、ある名詞句は、その意味が表すカテゴリー(役割)によって、発話が置かれた状況(スペース)において、そのカテゴリーに属する特定の成員(値)を指示することができる。

$$(3) F(x)=y : F \text{ 役割} \quad (x) \quad \text{スペース} \quad y \text{ 値}$$

例えば、[首都]という名詞句は、どの国の首都であるかに応じて、(4)で示すように、「ワシントンD.C.」や「北京」などさまざまな対象を表すことができる。

$$(4) \text{首都(米国)} = \text{ワシントンD.C.} \quad \text{首都(中国)} = \text{北京}$$

というわけで、指示性が高い名詞句(X)は、役割をA、値をaとすると、 $[X : A = a]$ と表すことができる。これは、あるスペース内でその名詞句は役割(A)として表示されても値(a)として表示されても等価であるという意味である。つまり、ある名詞句が、 $[A = a]$ と

表すことができるならば、その名詞句は指示性が高いことになる。同様に名詞句 (Y) の役割を B、値を b とすると、[B = b] となる。このとき、名詞文 (「X は Y だ」) に名詞句 (X) と (Y) を代入すると (5) になる。

(5) [A = a] は [B = b] だ。

例えば、話者が地図に載っている「北京」の場所を指差しているという状況において、「中国の首都はここだ」という名詞文は、(5) に代入すると、「[中国の首都 = 北京] は [ここ = 北京] だ」となり、明らかな同一指示文だと理解できる。

宮田 (2004) が指摘している「状況名詞+ダ」のような文末表現は、状況名詞に前接する連体修飾節が不可欠で、名詞文 (「X は Y だ」) と完全に一致している構造ではないが、本稿では、[節+状況名詞] を一つのまとまりとして、「X は Y (Y = [CLAUSE+N¹⁰]) だ」と見なす。それでは、「感じダ」や「場合ダ」は、指示性を持つ文構造を持っているのだろうか。以下で、用例を通じて検討する。

本稿で取り扱う用例は、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) から検索アプリケーション「中納言」の長単位検索で収集したものである。

3.2.2.1 「場合ダ」

「場合ダ」の用例は、代表的なタイプとして三つに分類できる。各タイプの用例数は表 4 に示す。

表 4 「場合ダ」における各タイプの用例数

分類 構文	タイプ A	タイプ B	タイプ C	その他 ¹¹	計
	[序数詞+は+ +〜場合ダ]	[名詞節+は +〜場合ダ]	[指示詞+は +〜場合ダ]		
「場合ダ」	82	169	53	79	383

次に、「場合ダ」における代表的な各タイプの用例を見る。

タイプ A : [序数詞+は+〜場合ダ]

(6) 他人とうまくつきあうための社会的技能 (social skills) という点で、不適切な対人行動には二種類のものがある。一つは、自分が前から並んでいるのに途中から割り込んできた人に注意できないというように、正当な権利であっても主張することができない場合である。もう一つは、自分の意見を述べるときに、必要以上に攻撃的になってしまう場合である。(『登校拒否・不登校』)

(7) 同一の債務について数人が保証債務を負担することを共同保証という。これには、三つの

10 便宜上、状況名詞を「N」、状況名詞に前接する連体修飾節を「CLAUSE」と表記する。

11 「その他」には、「問題は議員の政治的信条に基く行動が、結果的に利益団体の主張に沿うという場合である」(『アメリカ議会と日米関係』) のように、主語名詞句が普通名詞であり、「場合ダ」の三つの典型的なタイプには分類できないが、文意から「指定文」と考えられる例を含む。

態様のものがある。第一は、単純に数人の保証人がある場合である。第二は、数人が連帯保証人である場合である。第三は、数人が普通の保証人ではあるが保証人相互間で全額弁済の特約がある場合である（これを保証連帯という。）（『民法概論』）

(6) において、「一つ／もう一つ」は「場合ダ」の主語名詞句であるが、それぞれ前文脈にある二種類の「不適切な対人行動」のうちの一つを指している。言い換えれば、「一つ／もう一つ＝不適切な対人行動の一種類」となる。「場合ダ」のほうは、連体修飾節とともに「不適切な対人行動の一種類は何か」を意味的に解釈しているため、前述したように、「場合」を修飾する連体節と「場合」とを一つの塊として見なす。すなわち、「XはY（Y＝[CLAUSE+場合]）だ」となる。したがって、(6)におけるXとYの関係を、井元（1995）に提起されている文構造に適用すれば、次の通りということになる。

A（＝a）：不適切な対人行動の一種類（＝一つ）／（＝もう一つ）

B（＝b）：自分が前から並んでいるのに途中から割り込んできた人に注意できないというように、正当な権利であっても主張することができない場合／自分の意見を述べるときに、必要以上に攻撃的になってしまう場合（＝（不適切な対人行動のうちの）一つ／もう一つ）

つまり、「Xは[CLAUSE+場合]だ」において、XはA（＝a）に、[CLAUSE+場合]はB（＝b）に相当し、[A（＝a）＝B（＝b）]という意味関係が成立するため、(6)においては、Xという主語名詞句とYという述語名詞文とが同一指示の文だと考えられ、指示性を持つ文構造だと言える。

(6)の文構造と同じように、(7)は、前文脈に出現している「共同保証」という概念について、後文脈では「第一／第二／第三」のような序数詞が主語名詞句となり、「共同保証」の態様の一つを指している。(7)は「共同保証にはどのようなものがあるのか」に対する返答として、(6)と同様な文構造が適用できると考えられる。

A（＝a）：共同保証の一種類（＝第一）／（＝第二）／（＝第三）

B（＝b）：単純に数人の保証人がある場合／数人が連帯保証人である場合／数人が普通の保証人ではあるが保証人相互間で全額弁済の特約がある場合（＝（共同保証の一種類としての）第一／第二／第三）

(6)と(7)における「一つ／もう一つ」や「第一／第二／第三」のような序数詞は、意味的に一部が省略されたものであるが、「場合ダ」の主語名詞句として、つまり、主語名詞句の前文脈に出てきた主題の一種類という意味を表している。「場合」のほうは、『大辞林・第四版』の意味解釈によれば、「連体修飾語を伴って形式名詞的に用いられる」ものだとされ、「CLAUSE+場合ダ」は主語名詞句の意味解釈だと理解でき、タイプAの(6)と(7)は両方とも主語名詞句と述語名詞文が同じものを指している「指定文¹²⁾」であるがゆえに、指示性を持つ文構造

12 2.2節で説明した通り、本稿ではコンピュータ前後にある主語名詞句と述語名詞文の指示性に注目し、「同定文」と「指定文」の違いは捨象して、統一して「指定文」として扱う。

を有していると言える。

タイプ B : [名詞節+は+〜場合ダ]

(8) 薬剤の効果が期待できるのは、病気が早期に発見され、アルツハイマー病であると診断された場合です。 (『毎日ライフ』)

(9) 民法三百九十五条の適用上最も問題となるのは、抵当家屋について期間の定めのない賃貸借がなされた場合である。 (『民法入門』)

(10) 刑事罰が科せられるのは、例えば次のような場合である。 1 有害廃棄物の発生者が、有害廃棄物が無許可の T S D 施設に輸送されることを知りながら、それを看過した場合。2 違反であることを知りながら、暫定許可基準に違反した場合。3 有害廃棄物の発生者、輸送者、および T S D 施設が R C R A の下で必要とされている報告書を意図的に提出しなかった場合。4 マニフェストが添付されていないことを知りながら、有害廃棄物を輸送した場合。(『環境リスクと環境法』)

(8) ~ (10) のように、形式名詞「の」「こと」などによって名詞化された「名詞節」は「場合ダ」の主語名詞文であるが、「CLAUSE+場合ダ」における「場合」がタイプ A と同じく形式名詞的に用いられるものなので、「CLAUSE+場合ダ」は主語名詞文の意味を解釈していると理解できる。すなわち、[薬剤の効果が期待できる時] = [病気が早期に発見され、アルツハイマー病であると診断された場合] / [民法三百九十五条の適用上最も問題となる時] = [抵当家屋について期間の定めのない賃貸借がなされた場合] / [刑事罰が科せられる時] = [次の(1~4) のような場合] というような同一指示のものである。

つまり、「X は [CLAUSE+場合] だ」において、X は A に、[CLAUSE+場合] は B に相当し、[A = B] という意味関係が成立する。それゆえ、(8) ~ (10) は指示性を持つ文構造であり、「指定文」だと考えられる。

タイプ C : [指示詞+は+〜場合ダ]

(11) ここまでは、気づきのよい面について話してきた。気づいた人の成長を促し、生き活きたした毎日につながる気づきである。しかし、気づきが成長を妨げ、毎日を暮らしにくくする、ということもあるのだ。それは、あるひとつの気づきにあまりにもこだわり、その他の考え方ややり方を受け入れなくなってしまう場合である。 (『やる気を生み出す気づきの法則』)

(12) 一少額訴訟で分割払いの判決が出るのはどのようなケースが考えられますか？

一それは被告の申立を裁判所が認めた場合です。(Yahoo!知恵袋)

(13) もっとも、中川さんが総裁選出馬を決意したところで、鈴木再選を阻止することは不可能な状態だった。ただ、多少なりともチャンスがあるとすれば、それは全国の党員・党友による予備選挙を実施した場合だ。 (『日本をダメにした九人の政治家』)

(11) ~ (13) においては、「それ」などの指示詞によって前文脈にある内容を指し示している。つまり、「それ (= 気づきが成長を妨げ、毎日を暮らしにくくするということ) / (= 少額訴訟で分割払いの判決が出るケース) / (= 多少なりともチャンスがあること)」と表せる。タイプ C において、[指示詞 (= 前文脈) = [CLAUSE+場合]] という意味関係が成立すること

は明らかであり、タイプ C の文は言うまでもなく「指定文」であり、文構造的にも指示性を持っている。

本小節では、「Xは [CLAUSE+場合] だ」における代表的なタイプ A、B、C は、いずれも指示性を持つ文構造であり、「指定文」であることがわかった。なお、上記の用例からも明らかのように、コンピュータの前後にある「X」と「CLAUSE+場合」は同一指示のものであり、即ち「X」も「CLAUSE+場合」も「指示的名詞句」である。「指示的名詞句」であり指示性を持つ「CLAUSE+場合」は、「場合」の前に連体修飾節が必要だが、「CLAUSE+場合」が指示性を持つことと「ハ」志向を持つ「場合」は指示性が高いという想定は矛盾しないため、状況名詞「場合」自体が指示性を備えていると考えられる。

3.2.2.2 「感じダ」

本小節では、「感じダ」の用例を通じて、「感じ」は指示性より、叙述性が高いものであるかどうかを検証する。

「感じ」とは、「知覚によって生じる感覚」や「物事や人に触れて起こる感想、印象」を表すものであり、「感じダ」の用例では、「ハ」によって提示される主語名詞句はほとんど「認識対象」であり、「認識主体」は省略されるまたは文脈によって読み取られるのが一般的である。本稿は、主語名詞句を提示する「ハ」を明示するか省略するかによって、タイプ A とタイプ B に分類する。なお、「認識対象」が有生物か無生物かによって、タイプ A がさらに A-1 と A-2 に分類される。各分類の用例数を表 5 に示す。

表 5 「感じダ」における各タイプの用例数

分類 構文	タイプ A-1	タイプ A-2	タイプ B	その 他 ¹³	計
	[認識対象(無生物) +は+〜感じダ]	[認識対象(有生物) +は+〜感じダ]	[(認識主体/ 認識対象+は) +〜感じダ] ¹⁴		
「感じダ」	453	332	2174	60	3019

表 5 からわかるように、用例数の大半を占めているのはタイプ B であるが、タイプ A も A-1 と A-2 を合わせればある程度の数があると言える。次に、「感じダ」における典型的な各タイプの用例を見る。

タイプ A-1: [認識対象(無生物) +は+〜感じダ]

(14) 梅田を出た電車が、映画館や梅田コマ劇場の看板を左右に見ながら大きな陸橋を渡ると、すぐ中津駅です。中津は梅田と十三の間にあって、ちょっと小さく目立たない感じです。(『阪

13 「感じダ」の「その他」には、「予想外だったのは、まるで熱いやすりが食道の中を上へこすりあげるような焼ける感じだ」(『イーストウィックの魔女たち』) のような「指定文」が見られるが、用例数は僅少であると言える。

14 タイプ B のうち、認識主体が省略される「感じダ」の用例数は 1238 件であり、認識対象が省略されるのは 936 件である。

急線歴史散歩』)

(15) 外出先での私は、日頃滅多にない、自分の為だけに費やすことができる時間を一生懸命にこなしていました。そして緊張感と充実感でチョットだけ疲れて帰った私のために、やっばり残しておいてくれたマーボー豆腐。「何だあ、これ全部食べちゃっても良かったのにィ」なんて素っ気無い振りをして言った私でしたが心の中は、思った通りになっていたと言う自己満足で疲れが少し癒されました。しかし一人で食べる遅い夕御飯は、何だかこう、一味くらい足りないような感じです。(『プロの書き技』)

「感じダ」の主語名詞句が無生物の認識対象である(14)は、「中津駅」という駅についての話者の印象や感想、(15)は「一人で食べる遅い夕御飯」について話者が感じたことを述べている。すなわち、[CLAUSE+感じ]のほうはあくまでも話者による個人的な思いであり、「中津」という駅や「一人で食べる遅い夕御飯」には意味的に相当しないため、[中津≠梅田と十三の間にあって、ちょっと小さく目立たない感じ]や[一人で食べる遅い夕御飯≠一味くらい足りないような感じ]というふうに理解できる。というわけで、タイプ A-1 は「指定文」ではなく、無生物という認識対象について非指示的に叙述する「措定文」だということは明白である。つまり、タイプ A-1 は指示性を持つ文構造ではなく、[CLAUSE+感じ]も指示性の代わりに、叙述性を備えていると考えられる。

タイプ A-2 : [認識対象(有生物) +は+〜感じダ]

(16) 映画やテレビで活躍している女優さんにじかにお会いすると、あまりにも痩せていてびっくりするんだけど、米倉さんはテレビで見たとおりの感じですよ。(『週刊朝日』)

(17) 女性のうち一人は玄関前に置いてあった自転車を持って歩き、もう一人がそれに続いた。自転車の女性は、年齢三十代後半であろうか、比較的細い体躯でショートヘアーといった容姿である。あとに続いた女性は、どう見ても年齢は五十才を越えているように見えた。かなり太った体躯に髪はボサボサで化粧気がなく、着ている服も野暮ったく、前の女性のあとをトボトボと仕方なくついて行っているという感じだ。(『探偵手帳』)

タイプ A-2 は A-1 と同じような文構造を持ち、有生物である認識対象の「米倉さん」「あとに続いた女性」が、話者にどのような印象を与えているのかを述べている。[CLAUSE+感じ]のほうは、人である有生物の認識対象について非指示的に叙述し、主語名詞句とは等しい意味ではないため、対等な意味関係を成さずに、指示性ではなく叙述性を持っていると考えられる。そのため、タイプ A-2 も A-1 と同じく「措定文」に属する。

(18) 母は熱心すぎるぐらい熱心な教会信者で、私は愛情というより、むしろ母の作り上げた規則に育てられたような感じだわ。(『ロマンスへの誘い』)

本小節で前述したように、「感じダ」の用例には、(18)における「私」のような第一人称の認識主体が主語名詞句になる例も存在しているが、より一般的に見られるのはタイプ B のような、第一人称の認識主体が省略された文、あるいは認識対象が文脈によって提示されている文である。

タイプ B : [(認識主体／認識対象+は) +～感じダ]

(19) 感動して、お便りを拝見したが、皆さん、色々と、御自分のことを書いて下さり、ああ、こういう方が読んで下さったのかと、励みになった。読者の顔が見えてきたという感じである。およそ営利とは遠い編集で、私としては、この『寂庵だより』は、私のささやかな法施のつもりであり、行をさせてもらっているという感じにつづけている。(『寂聴生きいき帖』)

(20) このように何かの始まりには、力があるものですから、まずは自分の好きなこと、得意なことから始めるのがよいのです。とくに対人関係というのは複雑な情報処理を必要としますから、回復の途上では、かなりのエネルギーを必要とする作業です。そこでまず一人遊びから楽しめるようになって、それから他の人との関わりに興味をもてるようになります。テレビを見たり、CDを聴いたり、雑誌や新聞を読めるようになって、それから簡単な買い物に行けるようになるという感じです。(『統合失調症／分裂病とつき合う』)

(21) 人混みをかきわけて、一人の女の子が私のそばにかけよってきた。短大を出たのOLという感じである。(『恋愛の市場心理』)

(22) 広い路上のあちこちに、点々と自動車が停まっている。駐車してあるというよりも、やはり置き去りにされた感じだ。(『どこにもない短編集』)

(19) (20) のように、話者が自分の中にある気持ちや感想などを「感じダ」によって表す場合、話者という認識主体が省略されている。また、(21) (22) では、前文脈に現れた認識対象に与えられた印象が述べられていて、認識対象は前文脈から読み取れるが、「～感じダ」を述語とする文においては省略されている。このように、「～感じダ」は主題省略文になるため、文構造的には「措定文」とは言えないが、表されている文意から考えれば [CLAUSE+感じ] は叙述性を有していると思われる。

本小節から、「感じダ」における代表的なタイプ A、B は叙述性を持つ文構造であることがわかった。なお、タイプ A、B における「CLAUSE+感じ」は叙述性を持つ「非指示的名詞句」であることが明らかであり、そのことと、「ガ」志向を持つ「感じ」は指示性が低く、叙述性が高いという想定は矛盾しないと考えられるため、状況名詞「感じ」自体が叙述性を持つとすることができる。

3.3 まとめ

第3節では、まず、宮田 (2004) に例示されている状況名詞のうちから、使用頻度が高い上位10語を選出し、それらを考察対象とした。また、沈 (2014) における連用形名詞に後続する「ガ」／「ハ」の量的研究を参考にし、状況名詞と見られる「感じ」「動き」における指示性や叙述性の特性が、ほかの状況名詞にも共通しているかどうかを、3.2節で量的かつ質的な面から検証した。3.2.1節では、状況名詞への数量的な考察を行った結果、「感じ」は「ガ」志向の傾向が一番高いのに対して、「場合」のほうは「ガ」志向の傾向が一番低いことがわかった。それゆえ、「感じ」と「場合」を代表的なものとして、野田 (1996) における名詞の指示性や叙述性に関する論述に基づき、「状況名詞+ガ／ハ」の述語部分におけるコロケーションパターンについて数量的に考察した。その結果は、沈 (2014) による「ガ」志向の「感じ」は指示性より叙述性が高いという結論と齟齬がないため、「ガ」／「ハ」志向が、状況名詞の指示性や叙述

性の高低の傾向と関わっていることを量的な面から検証できた。続いて3.2.2節では「感じダ」や「場合ダ」の用例を通じて、西山による指示理論、坂原によるメンタル・スペース理論、井元によって提起された名詞句が持つ「関数」という構造に基づき、「状況名詞ダ」文が指示性または叙述性を持つ文構造であるかどうかを検討し、状況名詞が有している指示性や叙述性の傾向に関する想定を質的な面から検証できた。

以上のことから、沈（2014）における連用形名詞に後続する「ガ」／「ハ」のデータ分析手法は、本稿の研究対象となる状況名詞にも適用することが可能だと思われる。また、「場合ダ」と「感じダ」のような状況名詞の文末表現における相違点からも、状況名詞および「状況名詞ダ」文は異なった指示性や叙述性を有していることが窺える。

本稿の議論は、表6のようにまとめられる。

表6 「場合」／「感じ」に関する議論の取りまとめ

状況名詞	構文	文型	特性
場合	タイプA：[序数詞＋は＋～場合ダ]	指定文（X＝ [CLAUSE＋場合]）	指示性が高い
	タイプB：[名詞節＋は＋～場合ダ]		
	タイプC：[指示詞＋は＋～場合ダ]		
感じ	タイプA-1：[認識対象（無生物）＋は＋～感じダ]	措定文（X≠ [CLAUSE＋感じ]）	叙述性が高い
	タイプA-2：[認識対象（有生物）＋は＋～感じダ]		
	タイプB：[(認識主体／認識対象＋は)＋～感じダ]	主題省略文	

4. おわりに

本稿では、名詞句の指示理論とメンタル・スペース理論をもとに、用例数が上位で代表的な状況名詞である「場合」および「感じ」、並びにその文末表現である「場合ダ」および「感じダ」における主語名詞文と述語名詞文との間にある意味関係や、それが文構造上有している性質を明らかにした。

また、「様子」を例として、ほかの「状況名詞ダ」文にも、「感じダ」のような特徴的な文タイプが見られる。有生物の認識対象である(23)、無生物の認識対象である(24)、認識対象が省略され、前文脈から読み取られる(25)のような、認識対象について叙述する「措定文」または「主題省略文」がある。

(23) 山田朋子というその女性は、初めは警戒していた様子だった。（『冤罪の構図』）

(24) 水に抜かれた池の周辺は「紅葉真っ盛り」の様子でした（『Yahoo!ブログ』）

(25) ひとりで来談した母親は、年齢より若々しい感じの、ごく常識的な女性であった。宏の状態にこころを痛めており、学校に対しては、「肩身の狭い感じ」を強く抱いている様子であった。（『臨床心理学の世界』）

ほかの状況名詞およびそれらと関連する意味を持つ名詞の意味的・構文的な特徴については、紙幅の都合上、残された課題として稿を改めて、本稿の分析をもとに議論したい。

参考文献

- 井元秀剛 (1995) 「役割・値概念による名詞句の統一的解釈の試み」『言語文化研究』21, pp. 97-117, 大阪大学言語文化学部大学院言語文化研究科.
- 坂原茂 (1989) 「コピュラ文と値変化の役割解釈」『études françaises』25, pp. 1-32, 大阪外国語大学フランス語学科研究室.
- 坂原茂 (1990) 「役割、ガ・ハ、ウナギ文」, 日本認知科学会 (編) 『認知科学の発展第3巻』 pp. 29-66, 講談社.
- 沈晨 (2014) 「关于日语动词连用形向名词类转的研究」(日本語題目:「日本語動詞連用形が名詞への転成に関する研究」) 博士論文, 北京外国語大学.
- 新屋映子 (1989) 「“文末名詞”について」『国語学』159, pp. 88-75, 国語学会.
- 新屋映子 (2014) 『日本語の名詞指向性の研究』ひつじ書房.
- 角田太作 (1996) 「体言締め文」, 鈴木泰・角田太作 (編) 『日本語文法の諸問題—高橋太郎先生古希記念論集—』 pp. 139-161, ひつじ書房.
- 角田太作 (2012) 「人魚構文と名詞の文法化」『国語研プロジェクトレビュー』7, pp. 3-11, 国立国語研究所.
- 西山佑司 (1985) 「措定文、指定文、同定文の区別をめぐって」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』17, pp. 135-165, 慶應義塾大学言語文化研究所.
- 西山佑司 (1992) 「役割関数と変項名詞句—コピュラ文の分析をめぐって—」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』24, pp. 193-216, 慶應義塾大学言語文化研究所.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房.
- 野田尚史 (1996) 『新日本語文法選書—「は」と「が」—』くろしお出版.
- Fauconnier, Gilles (1984) *Espaces Mentaux*, Editions de Minuit. (坂原茂・水光雅則・田窪行則・三藤博 [訳] (1987) 『メンタル・スペース—自然言語理解の認知インターフェース—』白水社)
- 宮田公治 (2004) 「「状況」「状態」「様子」およびその類義語群の意味分析」『国語学研究と資料』27, pp. 13-24, 国語学研究と資料の会.

辞書

松村明 編 (2019) 『大辞林・第四版』三省堂

コーパスと用例出典

国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス」データバージョン 2021.03 (中納言 2.7.2) (<https://chunagon.ninjal.ac.jp>)

国立国語研究所とLago言語研究所「NINJAL-LWP for BCCWJ」データバージョン 1.40 (<https://nlb.ninjal.ac.jp>)